～市民と行政が一緒に歩む堀川浄化～ 堀川1000人 調査隊 2010

堀川1000人調査隊 2010実行委員会

1. 合言葉は、「堀川を清流に」 堀川1000人調査隊の発足

堀川は、名古屋の中心部を流れる全長約16kmの1級河川です。名古屋城の築城とともに掘られた運河で400年の歴史があり、名古屋の母なる川として、長く市民に愛されてきました。

しかし、大正、昭和と汚染が進み、今から50年ほど前には、「死せる川」とまで言われ、多くの名古屋の人に、「堀川は臭くて汚い川」という強い負のイメージが刷り込まれました。

心ある市民の間で、こんな堀川を何とかしよう、という声が高まったのは今から20年ほど前です。堀川のあちこちで、様々なグループが活動をはじめ、数年の間に堀川浄化の機運が高まってきました。

そんな中、行政すなわち名古屋市も市民の声に応えて、今から12年前の2007年に、自前の水源のない堀川に、木曽川のきれいな水を導水して浄化を試みる、3年間の社会実験を始めることになりました。これに呼応して幅広い市民が参加して堀川1000人調査隊2010を結成、導水実験の効果を、市民の視線、五感で検証する活動が始まりました。2010というのは3年間の実験のゴールの年を意味していたのです。

2010年に木曽川導水実験は終了し、このまま活動を継続するかどうかを話し合いましたが、堀川はまだまだ汚い、このまま活動を続けたい、という多くの声で、2010を超えて今に至っています。

合言葉は、「堀川を清流に」。2007年の発足当初165隊、2,262人でスタートした堀川1000人調査隊は、今では約2,700隊、53,000人超に成長しています。

2. 堀川1000人調査隊の活動目的と組織

堀川1000人調査隊2010は次の2つの目的をもって活動しています。

1) 行政の堀川浄化の施策・実験の効果を市民の視線で検証し、官と民が一緒になって堀川浄化に取り組むこと。
2) 堀川を愛する市民の輪を広げ、市民の間に気運を盛り上げること。

そのために次のような組織を立ち上げました。

- **定点観測隊**　COD、透視度の計測のほか、その日

結成式

に見た堀川の印象、色、においなどを市民の視線で水質調査を行い、インターネットで報告する。101隊 1,010人（2019年3月31日現在　以下同じ）

- **自由研究隊**　堀川の生き物観察、植物による浄化実験など幅広く堀川を研究する。大学、企業などが多い。40隊　650人
- **堀川応援隊**　幅広い市民が、自由な立場で堀川浄化を応援する。2,598隊　51,920人

調査隊会議

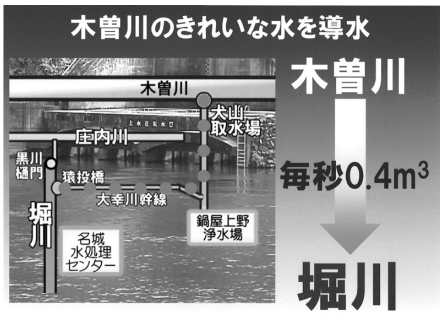
定点観測調査

定点観測隊や自由研究隊は、堀川に関してたいへん熱意もあり、知識も豊富な人になっていきますが、こういう人ばかりになってしまうと、いわゆる普通の人には近寄りがたい組織になってしまい、むしろ人が離れていってしまって大きなネットワークに広がらない。こういう問題意識から、私たちは、誰でも気軽に登録でき、特別な義務もなければ会費もいらない堀川応援隊を作ってネットワークを広げてきました。こういう工夫で、定点観測隊や自由研究隊という、頂点は高いけれどもすそ野は狭い山と、堀川応援隊という、頂点は低くてもすそ野の広い山が重なって、すそ野も広く、頂点も高いバランスのとれた山に私たちのネットワークは成長してきました。

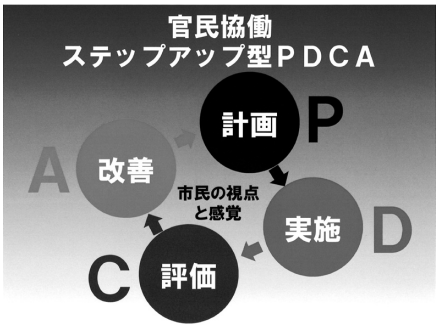
3. 水質浄化のための活動

定点観測隊は定められた項目の調査を、自由な時間に自主的に行ない調査結果をインターネットで報告します。サーバーに蓄積されたデータは12年間で5,600件を超え、今も年間約400件ずつ増えています。また写真や動画、折々の自由研究やレポートも無数に蓄積され、それらはすべて堀川1000人調査隊のホームページで公開されています。そのデータは大学の研究にも使っていただき、産官学民の連携に役立っています。

また、積みあがったデータを分析し、検討する調査隊会議を年2回ずつ、これまで24回開催してきました。この調査隊会議には、毎回市民と行政の計100名ほどが参加し、データに加えて、実際の堀川の現場で感じていること、気づいたことなどが報告され、活発な意見交換が行われます。これによって、これまであまりよく分かっていなかった堀川の実態解明がどんどん進んできました。



木曽川からの導水



PDCAサイクル

市民の気づきに応えて行政が実験をする、それを市民が観察して効果を検証する、その結果を受けて行政がさらに新たな実験・施策を展開するという、官民協働によるPDCAが、半年サイクルでどんどん繰り返されてきました。

この調査隊会議での議論は、行政の施策の立案に生かされ、この12年間で堀川は驚くほどきれいになってきました。

4. 水質浄化の事例

その一例をご紹介します。

堀川は海とつながっているため潮の満ち引きの影響を受けます。

水深の浅い都心部で、特に大潮の干潮の時に、ヘドロが露出する区間があります。

見た目が真っ黒で汚いだけでなく、においもひどく、時には酸欠で魚が死んでしまう。これを何とかしてほしいという声が、あるとき調査隊会議で話題になりました。

それを受けて行政が、都心部の300mの区間に、ヘドロの上に30cmほど砂をかぶせておおってしまう、「覆砂」という実験をすることになり、市民はその効果を観察することになりました。

観察は2015年から2年間続けられましたが、その300mの区間は、水底がくっきりと見えるほど透明感が高まり、臭いも感じなくなり、何より砂の中に住むようになった小さな生き物を求めてたくさんの鳥が集まるようになり、魚の姿も多く見られるように劇的に改善したのです。

官と民で覆砂の効果を確認したことで、2018年2月、今度は行政が300mの覆砂区間を1kmに延長する工事を行いました。すると、これまで堀川にとって最大のネックであった都心の中流部が驚くほどきれいになり、2018年の夏には、たくさんの魚がその中流部を通り抜けて上流部まで上がってくるようになり、これがまた調査隊の観察で確認され記録に残されました。

官と民で計画し、実行し、効果を検証するためにデータを蓄積し、分析し、そして次のアクションに結び付け、より大きな成果に結びつける、という官民協働によるステップアップ型のPDCAが大きな成果をあげた実例です。

このような実例は枚挙にいとまがないほどです。

堀川をよく知る私たちにとって、活動を始めてからの12年間の堀川の変化は、劇的と言っていい、素晴らしいものでした。

5. 自主的な清掃活動

もうひとつの実例をご紹介します。

10年ほど前まで、堀川には、コンビニ袋やペットボトルなど、今問題になっているプラスチック系のごみが数多く浮遊していました。

あるとき、定点観測をしている隊員から、「このごみは、人間が川に投げ込んでいるものだと思っていたが、どうも違うようだ。陸上のごみが風で飛んで水面に落ちたものなのではないか。」という声があがりました。「その証拠に冬の間あまりなかった浮遊ごみが春になると増えてくる。ひょっとしたら暖かくなると水辺に人が出てきてコンビニで買ったおにぎりとかを食べて、そのままごみを置いて行ったのが風で飛んで水面に落ちるんじゃないか。」

都心部ならではの小さな気づきでした。でもとても重大な気づきになりました。

そこで試しに、みんなに声をかけて、徹底的に護岸など陸上の清掃をしてみました。

すると、ものの見事に水面を浮かぶごみが減ったのです。

陸上を掃除すると、水面もきれいになるんだ、という仮説を立て、それを実証できたことは大変大きな自信になりました。多くの人に清掃活動を呼びかけるとき、こうした科学的な説明があるのとないのでは、参加者のモチベーションがまったく違ってきます。みんなが幅広く声をかけあい、周辺の住民や、企業の方々などもお誘いして、無理なく続けられる程度の、自主的な清掃活動があちらこちらで始まり、参加者を拡大しながら今にいたっています。

今の堀川の水面は10年前とは比べ物にならないほどきれいな水面になっています。

清掃活動

6. 啓発活動

こうして堀川1000人調査隊が積み上げてきたデータにもとづく科学的な知見を情報として幅広い人たちに伝えてゆくこともとても重要です。

私たちは、人はほんのちょっとしたきっかけで変わる、人が変わると川も変わる、と思っています。

今でもご年配の方に多いのですが、「堀川は汚い川で、あれは何ともならない。」というイメージが強く刷り込まれているケースが、アンケート調査などをみてもわかります。

そうではないんです！　今堀川はすごくかわってきている、人がかわると川もかわるんです！、という呼びかけを、ホームページやメルマガ、イベントでのブース出展などによって発信しています。

強く刷り込まれた堀川の負のイメージを払しょくするのは簡単ではありませんが自分たちの活動や堀川の浄化の実態を新聞、テレビなどに取り上げてもらう努力も続けており、少しずつイメージアップの効果があがってきています。

また、堀川応援隊の有志による英文ホームページも半年ごとにページを増やし、海外への情報発信も行っています。

啓発活動―小学生出前授業

啓発活動―生き物観察会

さらにまた、次の世代を担う小中学生など若い人たちには、小学校での出前授業や、堀川での体験乗船、生き物観察会、堀川エコロボットコンテストなど、様々な企画で堀川に興味、関心を持ってもらう活動をたくさんの調査隊・応援隊が自主的に続けています。

7. 上下流交流

堀川1000人調査隊2010は、木曽川のきれいな水を堀川に導水する実験をきっかけに始まりましたが、それを機に、木曽川や長良川・揖斐川といったいわゆる木曽三川の上流域に住む皆さんとの上下流交流会が始まりました。

諸事情によって一旦止まってしまった木曽川からの導水ですが、私たちはこのことを大変残念に思っており、心から導水の復活を願っています。2010年の導水停止後も、官と民の努力でかなりきれいになってきた堀川ではありますが、独自の水源をもたない堀川は、どうしても溶存酸素が少なくなりがちです。せっかく増えてきた生き物にとって、過酷な環境であることはまちがいありません。

これから先、もし流域の方々の理解を得られるならば、今の堀川は10年前とは基礎的な条件が大幅に改善していますから、もし今の堀川に、木曽川の酸素をいっぱい含んだきれいな水が再び入れば、間違いなく堀川は驚くような清流によみがえり、大きな魅力的なスポットとなるにちがいないと考えています。

それは名古屋だけでなく、上流域を含む流域全体に大きな波及効果を生むのでは、と考えています。私たちにとって、木曽川導水の復活は、この上下流交流の大きなモチベーションになっているのです。

そして一方では、人口減少や高齢化などの問題をかかえた上流部の方たちと交流することによって、下流の都会に住む私たちが相互理解に努め、お互いがお互いを応援しあうウィンウィンの関係を、毎年少しずつ積み上げてゆく努力を積み重ねています。

昨年は、7月に、下流から上流の木曽郡上松町にでかけて、森林資源を観光に活用しようとされている皆さんのもとを訪れ、現地体験と意見交換会を実施しました。

反対に12月には、上流の木曽6町村の方に下流に来ていただき、木曽のヒノキを使って完成した名古屋城の本丸御殿の見学をしていただいたあと、堀川で舟下りを楽しんでいただき、かつて木曽のヒノキを貯木してい

上下流交流―木曽川上流にて

た堀川沿いの跡地にできた博物館を見学したり意見交換をしました。

この交流会の特徴は市民だけでなく、行政も一緒に参加しているところにあり、2008年から毎年続けています。昨年は上松町の町長さん、名古屋市からは副市長にも参加していただいて、お互いの官と民が一体となって交流をしています。

8. 課題とこれから

私たちの活動にも、おそらく多くの皆様がたと同じように課題はたくさんあります。

一番大きな課題は、10年以上活動を続けていると、高齢化が進む一方で、なかなかその知見やノウハウを次の世代に継承することができないことです。

活動内容が高度化すればするほど、新しい人は、「そんなこと、できんわ。」と参加することにしり込みしてしまいがちです。

一緒に協働している行政は、どんどん人事異動で若返っていきますが、市民の側は大半が同じメンバーのまま高齢化が進んでゆく、という現実があります。

そういった課題も何とか克服しながら、「いつの日か堀川を清流に」という夢を合言葉に、市民と行政が一緒に歩む堀川浄化をこれからも続けてゆきたいと思います。

堀川1000人調査隊 2010実行委員会